九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# ディレッタントとしての代助 : ブールジェ『現代心理論集』と比較して

毛利, 郁子
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程二年

https://doi.org/10.15017/1901714

出版情報：九大日文. 28, pp.35-51, 2016-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

# ディレッタントとしての代助

## ――ブールジェ『現代心理論集』と比較して――

毛利郁子（MOURI Ikuko）

### 一、はじめに

漱石は日本の近代化と西欧の近代化の違いについては、『現代日本の開化』（夏目漱石「現代日本の開花」『漱石全集』、岩波書店、一九八六年十月）で外発的か内発的かの違いと指摘している。しかし日本が近代化をとりいれたということは事実であり、そこに生きる人間に西欧と同じ影響が生じたということも見逃してはならないことではなかろうか。科学の発達、様々な思想の流布、平等な社会になることにより逆に生存競争が激化するなどの社会の変化が生じ、そこに生きる人間に影響を及ぼさないはずはない。西欧での近代化に伴って起こったそれらの変化をポール・ブールジェ（Paul Bourget 一八五二～一九三五）[1]は『現代心理論集』[2]で指摘した。同じ影響が日本にも及び、それを漱石は感じ取り、文学として表現したのではなかったろうか。西欧と同じ問題はいくつかあるが、ここで取り上げるのは、ディレッタンティズム（dilettantisme）についてである。ディレッタントは、フランスのみならず、ドイツ、イタリア、イギリスなどで問題とされた人間像で、上流階級や豊かな社会にあらわれるものである。ブールジェは次のように言う。

> 社会の歴史において次のような一時期が来ることがある。すなわち、この豊かなしかし野暮な訓練によってもろもろの能力の一資本が作り出されたのであるが、あたかも自分の財産を増やしもしない大家の息子のように、どうしてその資本が自分の手に渡ったかを知ろうともしないで、文明人がそれをただ享受するという時期である。（略）現代の上流社会（略）はディレッタンティズムが行動に取って替わる明日なきこの時期に到達しているのである。（ポール・ブールジェ『現代心理論集』前掲　一四〇頁）

この時期はフランスでは一九世紀後半である。特に一八八〇年代、ディレッタントが非常に増化しているとブールジェはいう。日本では、明治も三〇年くらいを過ぎると、近代化が定着し豊かな階級が出現してくる。いわゆるブルジョア階級である。その結果親の財産でも暮らしていける世代が出現する。漱石が『それから』（『朝日新聞』一九〇九年六～一〇月）を書いた時期から大正中期くらいまでがそのような時代に該当するのではないか。代助の父も実業界に入って、財産家になり、兄があとを継いでいる。いわゆる高等遊民が存在できる時代である。

また小黒康正[3]は現代のオタクにディレッタントを比している。二〇世紀から二一世紀にかけて、マスメディアやサブカルチャーの台頭とともに、日本のみならず、世界的に急増した新

しい「人間像」である。この時代は過去に比べてかなり豊かで（もちろんそうでないものもいるが）、親の資産で若者が暮らしていけることが多くなる。それゆえ、親の資産で生活できる『それから』の代助は、現代の若者と共通したものがあるのではないか。それがディレッタンティズムである。ここでは、ブールジェのいうディレッタンティズムとは何かを、そして代助のディレッタントとしての面を見ていく。またディレッタンティズムの功罪を明かにすることで、漱石が現代にも投げかけた問題を考察する。

## 二、ディレッタンティズムとはなにか

ディレッタントは、語源からいえば、イタリア語の si dilettare、更に遡ったラテン語の delectare であり、「楽しむ」という動詞から生じた「享受する人」である。小黒によれば、近代以前にも類する人間像はあったし、一八世紀にも英語圏、フランス語圏、ドイツ語圏に広まって、ディレッタンティズムをめぐる考察は繰り返し行われたという。一九世紀のドイツ文学におけるディレッタンティズムについての研究もあるという。日本の過去にもあっただろう。一般的には次のように言われる。

> 芸術や学問に関する専門的な知識や優れた技能を有しながらそれらを生業の糧とせず、むしろ専門家とは一線を画そうとする好事家や趣味人（前掲　一頁）

また日本でもディレッタントに言及したものは多くあるが、ディレッタントとはなにか、ディレッタンティズムそのものについての言及は少ない。しかしブールジェの『現代心理論集』の中の「エルネスト・ルナン」（Ernest Renan　一八二三～一八九二）Ⅱ「ディレッタンティズムについて」（du dilettantisme）は、ディレッタンティズムについて詳しく説明をしている。それゆえその内容を検討する。

太宰施門[4]によると、一九世紀前半のロマン主義の理想が破れたとき、ただ一つ残ったのは科学であったという。科学的な発見や研究が相次ぎ、五十年代には科学万能主義が支配的になる。十九世紀中期の作家たちはみな科学に刺激を受ける。その最も有力なのがテーヌ（Hippolyte Taine　一八二八～一八九二）とルナンであった。

同じく太宰によると、エルネスト・ルナンはブルターニュ州で生まれ、勉強好きで何の学科でも一位の褒賞を受けていた。神学校の課程を順調に進み、パリへ出てからも、サン・スュルピス中央神学校で最高の課程を踏み、特に東方諸言語の深い研鑽を受け、学校の将来をも担う誉れの存在として皆に認められた。しかし、神学への疑いが生じ、神学校を辞し、私塾教師として生活の資を稼ぎながら、大学入学資格試験、哲学正教授資格試験をうけ主席で合格した。「セミティック諸言語の総歴史と比較構成」でアカデミーから賞を受け、その後も「精神批評論集」、「宗教史研究」、「新宗教史研究」などを書き文名は高まった。また考古学上の任務で一八六〇年フェニキアへ旅だち、

そこで一生の大作『キリスト教起源史』の構想を抱くことになり、その第一巻として一八六三年、『イエス伝』[5]は刊行された。イエスの天才的ヒューマニズムを賛辞しながらも、「奇跡や超自然」を全て非科学的伝説として排除し、「比類なき人間」すなわち「人間イエス」を主張したこの書は、すぐさま各言語に翻訳され、ヨーロッパで広く議論の的となった。非常な売れ行きで生活は成り立ったが、神を否定したルナンに対して「悪魔、ユダ、偽善者」の囂々たる非難が起こり、ルナンは前年任命したばかりのコレージュ・ド・フランスを罷免された。非難、糾弾だけではなく、悪質の威嚇や冷罵が浴びせられるほどであった。しかしこの『イエス伝』は、自然科学によって理論体系化不可能な要素は全てこれを迷信として排除するという聖書研究の世俗的伝統の端緒となったといわれ、ルナンは当時の科学万能主義の指導者の地位にテーヌとともに就いた。その後も『キリスト教起源史』を書き続け、全八巻を一八八二年完成させる。また一八七〇年の普仏戦争のときに、祖国復興を願い『国民とはなにか』をフランス国民のために熱を込めて書いたり、『科学の未来』も草稿するなどまさにその時代の指導者だった。当時の一般的な思想感情である真理の探究、科学万能論、理性の機能、推理作用の尊重があった。彼はそこで一切を知りつくそうとし、すべての現実、真理、真実を残さず究め上げようとする熾烈な好奇心を持った。古代語の研究、人間性、歴史、心理など研究の範囲を広くした。だが次第に疑いをむけ始める。真理は見いだされなかった。得られたものは僅かにただ美しい人間の物語、芸術であった。哲学と科学は永遠に求めても確実性は遂に達せられないものだった。科学は確実だと思われたが、次々に新しい真理が現れ、どこまで求めても絶対的真理はあり得ないことを逆に科学は証明した。宇宙はその法則があるだろうが、我々には完全には知り得ない。そして一つの方法、定まった方向への執着はファナティシズム（fanaticism 狂信）として排される。残されたのは、様々な方向に知識を求めるが、それ以上ではないものであった。彼はディレッタンティズムに陥る。ディレッタンティズムとは、ブールジェによれば、次のようだ。

C'est beaucoup moins une doctrine qu'une disposition de l'esprit, très intelligente à la fois et très voluptueuse, qui nous incline tour à tour vers les formes diverses de la vie et nous conduit à nous prêter à toutes ces forms sans nous donner à aucune. Il est certain que les manières de goûter le bonheur sont très variées, suivant les époques, les climates, les âge, les tempéraments, suivant les jours même et suivant les heures.

［それは一つの主義といったようなものでは更々なくて、きわめて知的であると同時に、きわめて享楽的な精神のある配置である。その配置はわれわれを人生のさまざまな形態の方に向かわしめ、あらゆるこれらの形態に適合するようにわれわれを導くが、そのいかなるものにも身を任せることをしない。確かに、幸福を味わう仕方は、時代によって、気候によって、天候、日にちさえ、時間によって非常

にさまざまである。」(Bourget.（1883）, *Essais de psychologie contemporaine*. Lemerre . p.55[6]）（以下仏文、英文共拙訳）

芸術や学問など知的なもので彼に興味を与えないものはなく、どんなものも根気よく研究され理解される。多方面な趣味と理解力と想像力でこの世の何もかもが集められ、それぞれを享受し、楽しむが、どれかに固執し、自分をその中に没入させることはない。無数のものの何か一つが特に他を圧倒することはなく、それぞれの場合によって様々に享受する。それは一人の人間で成し遂げられる最もひろい知識の獲得である。

なぜ彼は一つのものに没入しないのか。ブールジェは言う。

L'auteur des *Dialogues*[7] n'est pas un homme qui arrive au doute par impossibilité d'etreindre une certitude.C'est bien plutôt qu'il est tente d'admettre trop de certitudes.

「哲学的対話」の作者は確実性をとらえることが不可能であるということによって疑いに達する人間ではない。むしろあまりに確実性を認めすぎるのである。」(Bourget. *Essais de psychologie contemporaine*. p.60)

あるものの確実性を捉えられないからそのものを肯定出来ないのではない。あまりに確実性を求めるために、あるものを肯定できないのである。問題を追及し、確実性を手に入れることはできる。しかしその確実性以上の確実性を求めるのである。そこまで確実性を求めるのはなぜか。

S'il est pyrrhonien[8], c'est par impuissance à exclure une façonde penser contraire à cell qui lui paraît actuellement vraie.

「それがもしピュロン主義（懐疑論）であるなら、それは、現在真実であると彼に現れているものに対立する考え方を拒否することが不可能であるということによってである。」(Bourget. *Essas de psychologie contemporaine* p.60)

彼には今自分が真だと考えているものに対立するものを否定できないので、今自分が真だと考えているものも肯定できなくなる。今肯定しているものと違った肯定への道がみえてくる。彼は最もいちじるしい矛盾や奇怪事の背後にも、そこに隠されている真理の最も小さな部分を見出すことができる。彼はどんな誤謬でも、与えられたある個人もしくはある時代にとっては真理であることをよく知っている。

結局はあらゆるものを肯定できなくなる。決定的な解答を行い得ない。ルナンは言う。

僕はどうかといえば、我々を悲しい町では悲しく、陽気な町では陽気にならせる種類の一般的な感情によって、宇宙を味わっている。そういうわけで、僕は快楽的な人間の快楽を、遊蕩者の遊蕩を、世俗的な人間の世俗趣味を、有徳

な人間の高貴さを、学者の瞑想を、苦行者の峻厳さを楽しむ。一種の甘美な共感で、僕は自分が彼等の意識になっていると想像する。（略）僕は自分の思想の多様性という魅力的な花園を持って歩くんだ。（ルナン「哲学的対話」『世界大思想全集』第二三巻　平岡昇訳、河出書房、一九五三年　一二月　一七七頁）

それではすべて肯定できないのなら、すべてを捨て去るかというとそうではなくすべてを拾い上げるのである。肯定も否定もしないが、彼は相対的なさまざまの真理を拾い集めて、それに自分を適合させる。多方面な趣味と理解力と想像力で、彼が味わわなかったようないかなる快楽もなく、精神によって全宇宙であり、宇宙のあらゆる姿は彼のところに達し、彼の眼のなかに、鏡にうつるように反映するのである。そして思想の多様性の花園で遊ぶのである。したがってディレッタントは知性のエピキュリアン（快楽主義者）であり、ディレッタンティズムは、人生のあらゆる快楽を悔ゆることなしに受け入れるための最上の態度であるといえる。

『それから』の代助にもこのディレッタンティズムが表現されていないかということを次に考察する。

## 三、代助のディレッタンティズム

### a、知性のエピキュリアンとして

代助は様々な芸術を享受している。それは出来事の端々に表現されている。洋書は毎晩のように読んでいる。甥の誠太郎にせがまれ、回向院の最上席で相撲見物する予定にする。相撲に詳しいということが言外にある。兄の家に行くと兄嫁と姪がピアノを弾いている。代助にも難しいところを弾けというときれいに指を動かす。ピアノの練習をしっかりした経験を持たなかったらそう簡単には弾けないだろう。詩や小説には飽きている。詩や小説を相当読んだと言うことだ。隣の絵描きに、欄間の絵をヴルキイルに見立てて注文するが想像したよりまずかった。彼は求めすぎるのである。絵画に一見識あって、気に入らなかったと言うことでもある。絵にも相当詳しい。また代助は文学も友人に勧められて面白いものを寄稿したこともある。それは出版されるほどのものだった。しかしそう簡単には売れずやめてしまう。だが文学の才能もあるということだ。文学だけをすることのリスクも見いだす。友人寺尾は鉢巻きをして帝国文学の原稿を書いている。彼は売れなくても必死で頑張っているが代助はそれほどする気持ちもない。寺尾がわからない語学も教えたりする。代助は語学にも通じて洋書を取り寄せている。演芸館での中国の芝居を門野に薦められる。また兄嫁から隠して見合いをさせるため歌舞伎に誘われるが、もうすでに一度見ている。芝居、歌舞伎などいろいろな種類のものを鑑賞している。骨董にも父の影響もあり通じている。しかしいろいろなものをいい加減に行っているのではない。それぞれ専門化レベルまで達している。文学も絵画もピアノも。甥のするベースボールにも興味をもち、チョコレートを飲んだり、浅井黙語（忠）の茶

碗を使っていたりもする。

代助は様々なものを、享受している。さらに芸者とも遊ぶ。彼の芸者についての言及が特徴的である。

彼は肉体と精神に於て美の類別を認める男であつた。さうして、あらゆる美の種類に接触する機会を得るのが、都会人士の権能であると考へた。あらゆる美の種類に接触して、そのたび毎に、甲から乙に気を移し、乙から丙に心を動かさなぬものは感受性に乏しい無鑑賞家であると断定した。

（夏目漱石「それから」『漱石全集』第六巻、岩波書店、一九二九年七月　一六〇頁）

代助はあらゆる美の種類に接したいと考えている。そこで感受性の発達した接触の自由な芸者がいいと考える。芸者であれば、様々に美を追求しているし、それを鑑賞できるうえ、一人に限ることもないからである。変わらない愛などというものを口にするものは偽善者だと考えていた。もちろん後では異なるのだが。

代助は様々な芸術や娯楽を享受している。専門家レベルまで打ち込んだこともある。しかし、どれか特に打ち込んでいるわけではない。どれかに固執することはなく、さまざまな要素を見いだし、そこで結論を出すことを避け、それでも享受することをやめることはない。多様なものを享受する知性のエピキュリアンといえるのではないか。猪野謙二（『それから』の思想と方法」『漱石作品論集成第六巻』桜楓社、一九九一年　九月　二〇頁）も「場違いの国に生まれたエピキュリアン」ではないかと言う。

**b、父との対立**

このような代助と対照的なのは父の思考である。父親は一つの思想に凝り固まっている。いわば自分の思想を絶対的真理だと思っている。父親は儒教の感化を受け、旧藩主のため尽くした過去をもち、代助にも高等教育を受けたものは国家のために尽くすべきだと思っている。代助に言わせると、次のようだ。

御父さんは論語だの、王陽明だのといふ、金の延金を呑んでいらつしゃるから、左様いふ事を仰しやるんでせう。（夏目漱石「それから」前掲　三六頁）

ある思想を丸ごと信じ込む思想のファナティシズムである。思想はその思想独自の理論を定立する。ある人はその思想の理論を頭から信じ込み、その理論内容にすべてを当てはめようとする。しかし現実にはそれに合わないものも出てくる。それゆえ、結局はその思想も破綻してくる。儒教はもちろんよい面もあるが、信じ込みすぎると、忠を立てれば、悪い君主、支配者にも忠を奉仕しなければならないことになる。

思想の弊害について、漱石は『イズムの功過』においても言及している。イズムとは一纏めにきちりと片付いているように見えるわりには、現実の事態を解決するためその理論を使用と

するときにその理論は適用できないものだと漱石は言う。

然し人間精神上の生活に於て、人がもし一イズムに支配されんとするとき、吾人は直に与えられたる輪廓の為に生存するの苦痛を感ずるものである。単に与へられたる輪廓の方便として生存するのは、形骸の為に器械の用をなすと一般だからである。其時わが精神の発展が自個天然の法則に遵つて、自己に真実なる輪廓を、自らと自らに付与し得ざる屈辱を憤る事さへある。（夏目漱石「イズムの功過『漱石全集』第一一巻、岩波書店、一九六六年　一一月　二五一頁）

このように思想の枠からはみ出したものを許さないイズム、ここでは父の儒教であるが、これはあらゆるものを受け入れるディレッタンティズムとは全く逆の思考方法である。

代助は誠実というものを問題にした場合、誠実というどんなことがあろうともかわらないものではなく相手との摩擦ぐあいで出てくる精神の交換作用であると考えている。誠実であると思ってした行為も相手次第では誠実な行為でなく、不誠実になってしまう。絶対的な誠実なるものを想定しないのである。さまざまの要素を受け入れるディレッタントであればこその考え方である。

### c、分析精神

またブールジェは、分析精神が極度に押し進められていくとほとんど常にディレッタンティズムに達するという。

同様の法則がわれわれの精神生活と肉体生活とを支配する。われわれは諸器官の欲求をもつと同時に知的能力の欲求をもつ。分析力をもつものは分析する機会を探し求めるばかりでなく、それを生じさせ、経験を積み重ね、感動に身を委ね、快楽を複雑にし、悲哀を洗練する。それは分析家を徐々にディレッタントに変える感情的調練である。（ブールジェ『現代心理論集』前掲　一三二頁）

~keen analytic spirit ~（鋭い分析精神）については漱石旧蔵書 *Modern French Literature* [9] にも書かれ、過剰になると弊害があるものである。分析精神が鋭いと、考えていることと考えている自分をみつめることと、感じることと感じる自分をみつめることとが同じことになる。

次の表現は代助が分析精神といわれるようなものを持っていることを示してはいないだろうか。

自分の神経は自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感受性に払ふ租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報に受ける不文の刑罰である。（夏目漱石「それから」前掲　一三頁）

代助は「細緻な思索力」を持っていて、感受性も鋭い。そのためか代助は、何事によらず一度気にかかり出すと、何処まで

も気にかかる男であった。そして娯楽や芸術などばかりではなく、さらに分析の対象をもとめ、その対象は夢想のほうに向けられていく。三、四年前、平生の代助はいかにして夢に入るかと云う問題を解決しようと試みた事があった。

夜、蒲団へ這入つて、好い案排にうとしうとし掛けると、あゝ此だ、斯うして眠るんだなと思つてはつとする。すると其瞬間に眼が冴えて仕舞ふ。しばらくして、又眠りかけると、又、そら此所だと思ふ。代助は殆んど毎晩の様に此好奇心に苦しめられて、同じ事を二遍も三遍も繰り返した。

（夏目漱石「それから」前掲　五九頁）

腹のなかに小さな皺が無数に出来て、その皺が絶へず、相互の位地と、形状とを変えて、一面に揺いている様な気持がする。（略）さうして、其所に胡坐をかいたまま、茫然と、自分の足を見詰めてゐた。すると其足が変になり始めた。どうも自分の胴から生えてゐるんでなくて、自分とは全く無関係のものが、其所に無作法に横はつてゐる様に思はれて来た。さうなると、今迄は気が付かなかつたが、実に見るに堪へない程醜いものである。毛が不揃に延びて、青い筋が所々に蔓って、如何にも不思議な動物である。

（夏目漱石「それから」前掲　八八頁）

冒頭でも代助は自分の心臓の鼓動を気にするなど、他にもこのような自分自身の感覚を対象とした表現が多い。これはフランスのデカダン、神秘主義にもあてはまるものである。彼らは夢想のほうに顔を向けていて、感覚自体が空想の道具となっているのだとブールジェはいう。彼らとはユイスマン（Joris-Karl Huysman　一八四八～一九〇七）の小説『さかしま』[10]のデ・ゼッサントであり、彼は技巧と夢想のなかで自然のさかしま（さかさま――筆者注）を生きる。彼は明らかに実人生の真実を己の芸術の中に表現することに関心を抱いていないのである。

これをある文学仲間の幾人かのヒーローの奇矯と解してはならない。そこには現代フランス人の心を苛む深い不安のあまたの指標の一つが存在する。この不安は何に由来するのか。またなにゆえこういう心理的不均衡が、過去のいかなる社会よりも恵まれている社会に生ずるのであろうか。われわれの文明が看過している大法則でもあるのだろうか。あるいはまたおよそ文明とは本質的に何か胡乱なものであって、害を蒙らずには持続できないのだろうか。（ブールジェ『現代心理論集』前掲　二六〇頁）

代助もアンニュイや不安を感じている。知性のエピキュリアンとして娯楽や芸術を享楽しているのに、なぜ代助はそう感じるのか。

## 四、ニル・アドミラリについて

代助は三千代と別れた後、再会するまでの間に変化している。彼はニル・アドミラリの状態に陥っていた。思索と観察の力によってこの四、五年の間に変わっていた。

二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのにすでにnil admirari（ニル アドミラリ）の域に達して仕舞つた。彼の思想は、人間の暗黒面に出遭つて吃驚するほどの山出ではなかつた。彼の神経は斯様に陳腐な秘密を嗅いで嬉しがる様に退屈を感じてはゐなかつた。否、是より幾倍か快い刺激でさへ感受するを甘んぜざる位、一面から言へば、困憊してゐた。（夏目漱石「それから」前掲二四～二五頁）

ニル・アドミラリとはニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzshe（一八四四～一九〇〇）の著作に散見するものである。しかし、清瀬によればこれは本来ローマの詩人ホラチウス（Quintus Horatius 前六五～前八）の使った用語である[11]。ホラチウス『書簡集』第一巻第六書簡冒頭部の句である。何ものにも驚かないという態度のみが人を幸せにし、幸せを維持するほとんど唯一の方法と説くとあり、アナクサゴラス（Anaxagoras,前五〇〇頃～前四二八頃）が息子の死を知らされて、私に授かったものが死すべきものであることは知っていたと答えたとされ、それは倫理的に強靭なことを示している意味を含む言葉であった。ピタゴラス（Pythagoras,前五八二～前四九六）はこのような平静な心こそ、哲学的努力の目標だという。

しかし、森鴎外が『舞姫』の中で使ったニル・アドミラリは意味が違ってはいないだろうか。冒頭で記述されているが、ドイツからの帰りの船の中で日記が書けない、行動に移れないのは、ドイツ生活でニル・アドミラリを身につけたからかと豊太郎は自問する。倫理的強靭さを表す何ものにも驚かないという意味のニル・アドミラリを身につけたから、日記が書けないと読むとおかしな文脈になるのではないか。またドイツ生活でローマの詩人ホラチウスのものを学んだこととは直接結びつかない。さらに上述の代助の場合も、何ものにも驚かないという意味ではあるが、それが倫理的強さのような肯定的意味を持っていないのではないか。なぜならニル・アドミラリの域に達することによって代助は困憊すなわち疲れ果てているのである。ニル・アドミラリは豊太郎と代助の場合、古代の哲学者たちのいう意味とは異なっているのではないか。

それではニーチェの言葉の意味をみてみよう。ドイツ文化との関係に言及しているのが次の文である。

教養ある人間とは、今日では、とりわけ、歴史的知識によって教育されたものである。（略）まさにあらゆる感激を鈍磨させることこそが、今日、これら、ニル・アドミラルの境涯の賛美者たちが、一切のものを歴史的知識によって把握しようとするときの、目標なのである。（ニーチェ「ショーペンハウアー哲学とドイツ文化との関係」『ニーチェ全集第三巻』

渡辺二郎訳、理想社、一九六五年　五月）

当時のドイツ文化は歴史的知識を教養あるものとしている。一九世紀のドイツは哲学的には「歴史の世紀」と言われている。それはヘーゲル歴史哲学の影響ということだ。そのような歴史的知識をもつことで当時のドイツ人は教養あるものであり、そのようなものたちがニル・アドミラリを賛美しているとニーチェは言う。

彼らは歴史意識によって感激を避けた。けだし、ゲーテの思い違いであったかもしれぬように歴史が感激を生み出すことはもはやありえないのである。鈍感こそが現在では nil admirari（何事にも驚歎せず）のこれらの非哲学的驚嘆者たちが一切を歴史的に把握しようとするときの目標であるからなのだ。（ニーチェ「第一編　ダーヴィット・シュトラウス告白者と著述家」『ニーチェ全集　第四巻　反時代的考察』小倉志祥訳、理想社、一九六三年　三月　一九頁）

しかし歴史的知識では、感激しなく、鈍感になってしまい、結局はニル・アドミラリすなわち非哲学的驚嘆者になってしまうという。

何ものにも驚嘆しないこと―この警句に彼（古代の哲学者――筆者注）は哲学を見て取る。そして一人のドイツ人、つまりショーペンハウアーは逆に、驚嘆することがすなわち哲学することであるとまでいう。（ニーチェ「道徳に対するドイツ人の態度」『ニーチェ全集　第七巻　曙光』茅野良男訳、理想社、一九六二年　一一月　二一〇頁）

古代の哲学者たちはニル・アドミラリすなわち何ものにも驚かないによって哲学しているが、ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer　一七八八～一八六八）は驚くことが哲学することで、ニル・アドミラリの賛美者たちを鈍感で哲学しないものたちだと言う。当時のドイツは歴史的知識を持つことが教養あるものだが、それでは鈍感になって感動しなくなり、すなわちニル・アドミラリになって哲学しないということである。ニーチェのいうニル・アドミラリの意味は否定的である。これは鴎外と漱石の場合と重なるのではないか。古代の哲学者たちの倫理的強靭さ、及び哲学するという肯定的意味はないのである。鴎外と漱石がニーチェの意味で使ったと思われるが、二人はどこでニーチェのこの言葉を知ったのだろうか。

ニーチェの一連の著作が刊行されたのは一八七〇年代から一八八〇年代である。鴎外はちょうどその頃一八八四年から一八八八年までドイツに留学している。鴎外はドイツでニーチェの著作を読んだろうし、読める条件にあった。それでは漱石はこのニーチェのこの言葉をどこで知ったのかが問題である。ニーチェに関しては、英国留学時のノートに多くの言及があり、著作『ツァラトゥストラ』（Nietzshe.（1885）, *Also sprach Zarathustra*. Ein

Buch für Alle und Keinen.）にも英文での書き込みがある。また『我が輩は猫である』や「思い出すことなど」の作品中にも言及されている。また漱石旧蔵書の英書のいくつかにもニーチェのことが記述されている。それらにニル・アドミラリについての記述はない。それならどこでこの言葉を知ったのだろうか。

杉田弘子[12]によれば、明治政府は留学生を多く諸外国に送ったが、とくにドイツには留学生の八〇パーセントになるほどであり、多くのドイツ文化と共に、ドイツ哲学などの思想が流入してきた。そして詩的アフォリズム（箴言）で書かれたニーチェの思想も、高山樗牛らによって紹介された。明治三〇年代ニーチェ論争があったほどであったという。その後も阿部次郎、安部能成、和辻哲郎そして生田長江ら漱石木曜会のなかからニーチェ研究がさかんになって来る。なかでも生田長江[13]は漱石に勧められて、明治四四年『ツァラトゥストラ』の邦訳をする。その後大正になっても全一〇巻中九巻までを訳し続けている。当時ニーチェ研究は非常に盛んであった。もちろん社会主義思想の流入など様々な思想が入り交じりニーチェだけが研究されていたわけではないが、ほとんどの作家たちが生田長江のニーチェ全集を読んでいたと想定され、ニル・アドミラリの語は知っていただろう。鴎外、漱石、のみならず芥川、蒲原有明、高見順などの文学の中でも使われているのである。（もちろん作家によってそれぞれで意味が違うかもしれないのでここでは他の作家については問題にしない。）

漱石はこの言葉によってなにを表現したかったのだろうか。ニル・アドミラリが何ものにも驚かない、鈍感で、哲学しないという意味であれば、この言葉によって、代助のどのような状態を説明することになるのか。それにはニーチェの思想を見てみる必要がある.

ニーチェの思想はそう簡単に要約出来るわけではないが、マックス・ノルダウ（Max Nordau 一八四九～一九二三）の *Degeneration*[14]に簡潔に示されている。

> 昔、支配種族は第一に道徳観念を造り出せり。（略）残酷、自負、勇気、危険に対する侮蔑、冒険を喜ぶ心等は善なるものと考えたり。これに反して、臆病、危険に対する恐れ、用心深きことは悪とみたり。（略）奴隷種族には又これに反せる奴隷の善悪観ありき。（略）愛隣を美徳となし、力を貸すこと美徳となし、暖かきこころ、忍耐、勤勉、友情は彼らにとりて美徳とせられたり。何となれば斯くのごときものが彼等の生存状態を安全にし、幸福ならしむるが故なり。（略）現在奴隷の道徳が支配する。ローマ人がそれをなした。（略）残酷は人間の根本的本能である。（略）善悪を以て人間を拘束することなく、人間をして自由に其の行く処に進ましむるときに、我らはその処に超人を見いだすべし。
>
> （マックス・ノルダウ『現代の堕落』中島茂一訳、大日本文明協会、大正三年三月）

キリスト教の道徳は弱者のものであり、人間は本来残酷で危

険を好み、冒険するものであるという考え方である。「神は死んだ」とし、人間本来の生き方を呼び戻せと新しい価値観を主張する。超人を想定し、自由に生きる「生の哲学」を主張するニーチェの思想は、十九世紀末、想像力の世界に閉じこもりペシミズムが蔓延していたフランスでも、エネルギーの唱導者として迎え入れられる。ジャン・ピエロ（Jean Pierrot）[15]によると、当時のフランス人たちはニーチェの作品の中にデカダンスの世界観に対する告発と同時に、ヨーロッパ文明を蝕む病弊を癒やす効力を持つ新しいモラルの主張をも見いだしたと言う。ニーチェ以前のフランスのデカダンスの源を、ショーペンハウアーのペシミスムと奴隷の宗教としてのキリスト教と民主主義の理念の中にあるとする。ショーペンハウアーは生きる意思の否定という結論を見いだしたが、ニーチェはディオニュソス的なギリシャ人のように、永遠に生きることを欲し、あらゆる手段に訴えて生きることを正当化しようとする意志を持つ。このようなニーチェの影響は一八九八年『ツァラトゥストラ』の仏訳よってさらに大きくなる。そしてにニーチェはルナンに対して次のように批判する。

> 彼はたとえば科学と高貴さを一つに結び合わせたがっているらしいが、（略）ルナンのこの精神、元気をそぐ精神 は憐れな、病める、意志の病気にかかっているフランスにとってもう一つの宿業である。（ニーチェ「或反時代的人間の遊撃」『ニーチェ全集十三巻 反キリスト者』原佑訳、理想社、一九六五年六月 七八頁）

ルナンはたしかに様々なものを享楽し、人生を楽しむ態度ではあるが、ニーチェからいえばルナンは、神は否定したけれども、元気のない、意志の病にかかってしまっているのである。それはフランスの病とも言えるものであった。超人思想をもち、生きるためには「自我」を主張し、モラル破壊も辞さないニーチェにとっては病にしか見えなかった。

ニル・アドミラリという言葉を漱石が使っていることによってニーチェ的なニル・アドミラリ批判、「生」の哲学を背後に持っていたことは見逃してはならない。しかしそのことによって必ずしも超人思想を取り入れたことにはならないと思われる。だが代助がディレッタントとして、知性の快楽主義者でありながらも、肯定も否定もしない意志の病にかかり、哲学しない状態に陥って、困憊してしまい、生きるという事に関しては積極的ではないということを表していることは間違いない。生きることは、何かを肯定し、行動することだからである。

## 五、代助が行動するのはなぜか

そのような代助が変化していくのはなぜなのだろうか。ブールジェの評論に戻ってみるとディレッタントの欠点を次のように記述している。

Cette rançon , certes, serait terrible si, à l'incapacité d'affirmer, correspondait l'incapacité de vouloir. (…) Il faudrait donc admettre que l'extrême intelligence répugne aux conditions imposées à l'action.

〔その代価はとても恐ろしく、肯定の不可能、意志の不可能に対応する。（略）従って最上の知性は行動に強いられる条件を嫌う。〕（Bourget. *Essais de psychologie contemporaine* . p.68）

ディレッタントの弱点は肯定しないことであり、そうすると意志の不可能ということを伴う。そうして意志が不可能であれば、行動しないという結果になる。行動することはたえざる肯定を、そして意志を伴うからである。代助は働かなかった。それは親や兄の財産があるからではあったが、麺麭に関係した労働は劣等と考えているからである。しかし平岡は次のように言う。

僕は失敗したさ。けれども失敗しても働いてゐる。又是からも働く積りだ。（略）君は笑つている。笑つているが、其の君はなにも為ないぢやないか。君は世の中有りの儘で受け取る男だ。言葉を換へて云ふと意志を発展させることの出来ない男だらう。意志がないと云ふのは嘘だ。人間だもの。其証拠には始終ものたりないに違ひない。（夏目漱石「それから」前掲　八〇頁）

平岡は代助には意志がないと言う。平岡は自分の意志を現実世界に働きかけ、自分の思いどうりになったというところに自分の存在価値があるといい、代助も本当は物足りないのではないかと、そして代助はなにもかもを頭の中で考えるだけだと責め立てる。平岡の言い分はディレッタントの弱点を見事に言い当てている。ニーチェ、ブールジェ、平岡に代助は批判されている。

それに対してディレッタント代助は分析精神を働かせ、社会批判をする。西欧の影響で、日本人はみな精神的にも、肉体的にも、道徳的にも疲労している。平等な社会が逆に生存競争を激化し、個人はばらばらになってしまっていると近代社会が孕んでしまった問題を指摘する。これらについては、ブールジェも主張している。（ブールジェ「スタンダール」『現代心理論集』前掲一四四～一四九頁）代助はそんな社会で働けないし、他人を自分の考えどうりにするなんてとても出来ないと言う。働かないことに関してはまだいい訳ができた。

肯定しない、意志の不可能、行動しないということによって大きな問題があった。三千代のことである。三千代を得たいという意志はどこから出てきたのか。ここに漱石はニーチェの思想を適応しているのだろうか。生きるための「生の哲学」強者のモラルを使い、生きる意志を表明したとも考えられないことではある。しかし漱石は、ニーチェをそれほど評価していない。

「自我の主張」の裏には、首を縊くくったり身を投げたり

すると同程度に悲惨な煩悶が含まれてゐる。ニーチェは弱い男であった。多病な人であつた。また孤独な書生であつた。さうしてザラツストラはかくのごとく叫んだのである。」（夏目漱石「思い出すことなど」　前掲　三三五頁）

Nietzsche's "Uebermensch" is the worst phase of this ideal man.

〔ニーチェの"超人"はこの理想を持つ人間の最も悪い面である。」（夏目漱石「*Thus Spoke Zarathustra* への書き込み」『漱石全集』一六巻、岩波書店、一九六七年　六月　一八五頁）

ニーチェの「自我の主張」、超人思想は代助はもっていないのではないか。それなら何が代助に行動させるのか。

ブールジェはもちろんニーチェの思想を知っていた。『現代心理論集』が書かれた一八八三、一八八五年頃、ブールジェは進化論者であり、神の存在を否定していた。しかし　フランスの十人の作家たちを分析するうち、どの作家にもペシミスムが生じていると考察するようになる。その原因は観察をもとにする文学が決定論に落ち入ってしまい、人間の意志を蔑ろにしたと考え、意志の自由と不可知をもとに『痛ましい謎』、『嘘』を刊行し、さらにモラルを加味した『弟子』[16]を出すに至り、その後はキリスト教へと近づいていく。ニーチェと同じく意志の病にかかっているフランスを批判しながら、最終的にはキリスト教に帰って行く。しかし自由意志は精神の自発性とともに主張していく。そしてハルトマン[17]（Karl von Hartmann　一八四二〜一九〇六）から無意識を学んでいた。

この分析精神と実生活との間につまるところ根本的な対立関係があるからだ。なぜならいかなる人生も無意識を基盤にして成り立っているからで、まさしく分析精神にはこれに支配される者の無意識を次第に消滅される傾向があるからだ。（ブールジェ『現代心理論集』前掲　二五一頁）

分析精神が旺盛な人は意志の弱体化、感性の枯渇が生じているが、無意識こそ現実生活に向かわせるものだとブールジェは考えていた。ブールジェの「無意識」はかなり広い意味で使われていて意志や個性とも呼べる自然発生的な考え方や感じ方のことだと田中琢三（「ある自然主義文学論、ポール・ブールジェ『現代心理論集』をめぐって」『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会第二〇号　二〇〇〇年　五月　四四頁）は言う。またこの「無意識」はウイリアム・ジェームス（William James　一八四二〜一九一〇）も主張するもので、漱石がジェームスに影響を受けているということは研究されている。またジェームスの一八四八年の発見が「無意識」界の発見であると小倉はその著で書いている。[18]漱石自身もジェームスが自分の作品創作に近いと「思い出すことなど」でも述べている。森田草平の恋愛相手平塚明子、後の平塚雷鳥をアンコンシャス・ヒポクリットと称したなどという談話も残っている。「アンコンンシャス」は無意識である。

「無意識」の中にあった三千代への「愛」が代助に意志、生きる意志、行動への意志を自然発生的に引き起こす。平岡と三千代を結婚させた時、三千代への愛はすでにあったのだが、心の中に閉じ込められていた。彼らが幸せに暮らせば、もうそのままになってしまっただろう。それでも三千代のことは気にかかっていた。そして二人と再会し、三千代は不幸せである。しかも代助は見合いをさせられ、結婚という事態が現実化してくる。そのとき無意識の中に閉じ込められていた三千代への愛が呼び覚まされる。

代助は今まで嫁の候補者としては、たゞの一人も好いた女を頭の中に指名してゐた覚がなかつた。が、今斯う云はれた時、どう云ふ訳か、不意に三千代といふ名が心に浮かんだ。（夏目漱石「それから」前掲　一〇〇頁）

此所まで考えた時、代助の頭の中に、突然三千代の姿が浮んだ。（夏目漱石「それから」前掲　一六〇頁）

代助は分析精神が過剰で、愛情などの感情はほとんど意識上にはなかっただろう。作品の最初のころは、三千代のことはなんとなく気にかかるという表現である。だがこころの底にあった愛は次第に意識化されてくる。三千代がどうして奥さんをもらわないのか聞いたとき、その思いは出現する。

自然の情愛から流れる相互の言葉が、無意識のうちに彼らを駆つて、準繩の埒を踏み越えさせるのは、今二三分の裡にあつた。（夏目漱石「それから」前掲　一八八頁）

代助は考えてみると、三千代は平岡に嫁ぐ前にすでに自分に嫁いでいたのだということに気がつく。その時は平岡との友情を先にしてしまうが、それでもその気持ちはこころの奥にしまい込まれていた。それに気づいたとき代助はふらふらとした。ディレッタント代助は、三千代との愛を成就するという意志を持ち、さまざま困難に立ち向かうという行動を起こす。

## 六、おわりに

ディレッタント代助は様々な娯楽、芸術を楽しんでいる。さまざまなものを受け入れるが、それのどれかに固執することもない。多様なものを受けいれ、享受することで、人生を楽しむ知性のエピキュリアンである。それに対してある一つの思想に固執することの狭量性、思想が絶対的真理を主張し、すべてのものをその枠の中に押し込めることの危険性も代助は指摘する。

実際この間の歴史を見ると思想的対立が世界を二分したり、あるいは過激思想など、思想に固執することの危険性は明かではないだろうか。漱石はそれほどの結果を予期していただろうか。日本でこれほどの先見性は誰にあっただろうか。様々なものを受け入れる多様性のあるディレッタンティズムはある意味

必要なのものではなかろうか。

だがあまりに芸術などの想像力の世界に入り込んでしまうと現実感がなくなり、意志の喪失、行動できないなど、生きていく上での問題を生じてしまう。現代の若者も空想の世界と現実の世界と混同や混乱もあったり、また引きこもりなどもその例ではなかろうか。さらに働かないことに対して、現代の若者も代助の言い分は十分に理解できることであり、パンのためだけではなく、自分の才能を生かして働きたいというのはみなの願いではなかろうか。働くことの意味を再考させるものである。

漱石が一〇〇年も前に書いた『それから』の代助のような性格は当時は少数であり、特殊人であったが、日本の現代では多くの若者が代助であるようになり、まさに現代の問題と化している。ルナンの影響はそんなに長くは続かず、消えてしまったということだが、漱石が創作した代助は日本の中で、今も生きていると思われる。

＊旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

【注記】

1　ポール・ブールジェは『現代心理論集』で評価を受け、テーヌから評論家の道を薦められたが、小説家になる。なかでも問題小説である『弟子』を刊行することにより、自然主義を終わらせることになった。その後はいくつかの問題小説とモラルと不可知をテーマに小説を書いていく。思想的な変化が大きく、進化論者からキリスト教へと帰って行くことになり、最後はフランス革命も否定した。漱石は『弟子』とモラルと不可知をテーマにした七冊のブールジェの著作を収蔵していた。

2　Paul Bourget.（1883）, *Essais de Psychologie contemporaine* lemerre.Bourget.（1885）, *Nou-veaux Essais de psychologie contemporaine*. Paris: lemerre. 復刻版（1899）Plon.（ポール・ブルジェ『現代心理論集』平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版局、一九八九年　一二月）ボードレール、フローベル、スタンダール、ツルゲーネフ、アミエルの五人が邦訳されている。副題はデカダンス・ペシミズム・コスモポリタニズムの考察である。この作品は英訳されていない。漱石がこの著作を読んだ可能性は高いが確証はまだ得ていない。知っていたことは確かである。漱石旧蔵書のマックス・ノルダウの *Degeneration.* やフランス文学史の著作 *Modern French Literature* はブールジェの視点で書かれているうえ、ブールジェの箇所には傍線がある。また *French novelist To-day* ではブールジェの詳しい解説があり『現代心理論集』がブールジェの重要な作品であるとの説明がある。さらに天理大学の図書館には一九〇一年の仏語の『現代心理論集』が所蔵されている。表紙裏に T.Suzuki のサインがある。T.Suzuki は漱石の妻の妹婿にあたる鈴木禎次である可能性がある。鈴木禎次は名古屋を作った建築家として現在も名高く、漱石留学と入れ代わりに一九〇二年から三年間イギリスとフランスへ留学しているのでフランス語の力は十分にあったと思われる。漱石とは親戚づきあいをして、漱石の墓の設計もしている。また漱石自身もフランス語を勉強しているし、蔵書には残っていなくとも、その存在を知っていて、読める条件にあった。さらに確証を目指す必要がある。

3　小黒康正「孤立化するディレッタント　ブールジェ、マン、カスナーの場合」『九州ドイツ文学』九州大学独文学会、第二六号　二〇一二年　一月

4 太宰施門『ブゥルジェ前後』高桐書院、一九四六年 八月 一四〜二六頁

5 Ernest Renan.(1863), *Vie de Jésus.* Texte disponible dan Les Classiques des sciences sociales.(エルネスト・ルナン『イエス伝』津田穣訳、岩波書店、一九四一年 一月)漱石旧蔵書に英訳本有り。

6 Paul Bourget.（1883), *Essais de psychologi contemporaine. Paris*: lemerre. イッポリット・テーヌ、エルネスト・ルナン、デュマ・フュス、ルコンド・リール、ゴンクール兄弟の五人は邦訳されていない.

7 Ernest Renan.(1888), *Dialogues.*（エルネスト・ルナン「哲学的対話」『世界大思想全集二三』平岡昇訳、河出書房、一九五三年 一二月）

8 pyrrhonien. ピュロン主義「現代フランス語辞典」白水社、一九九三年 三月（万物は無常であり、何一つ確信しえず、一切の判断を留保（エポケー）し、魂を無憂（アタラクア）に導かねばならない。）

9 B.W.Wells.（1910), *Modern French Luitrature* . London: Sir I.Pitman & Sons. p435 漱石旧蔵書

10 Joris-Karl Huysmans.（1884), *À rebours.* Paris: G.Charpentier.（ジョリス・カルル・ユイスマン『さかしま』澁澤龍彦訳、河出出版、二〇〇二年三月）イギリスのオスカー・ワイルドと共にデカダン派。

11 清瀬卓、「ニール・アドミラリイ」の世界 ―葉巻とワルツと舞姫と―」Cosmica 京都外国語大学機関誌編集委員会編 二〇〇五 九五〜一一一頁

12 杉田弘子『漱石の『猫』と二ーチェ―稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち―』白水社、二〇一〇年 一月

13 生田長江（一八八二年〜一九三六年）二ーチェ『ツァラトゥストラ』を漱石の薦められ邦訳するが、わからないところは鴎外に聞きに行った。新潮社から一九一一年一月に刊行する。その後全集を出す。前掲12参照

14 Max Nordau.（1892), 独名 *Entartung* 英名 *Degeneration.* 漱石旧蔵書（マックス・ノルダウ『現代の堕落』中島茂一訳、大日本文明協会、大正三年三月）この著作は日本では近年一般的に『退行論』と呼ばれているが、大正三年に文語文で邦訳されている。

15 Jean Pierrot.（1977), *L'imaginaire décadent*（1880-1900).（ジャン・ピエロ『デカダンスの想像力』渡辺義愛訳、白水社、二〇〇四年 六月 三六三頁

16 Paul Bourge .(1889), *Le Disciple.* Paris: Lemerre.（ポール・ブールジェ『弟子』内藤濯訳 岩波書店 一九四一年七月）

17 Karl von Hartmann（一八四二〜一九〇六）「カール・ハルトマンはショーペンハウアーの弟子で、日本にケーベルを送り出した。『無意識なるものの哲学』を一八八四年刊行した。」（日本におけるショーペンハウアー」『ショーペンハウアー全集別巻』茅野良男訳、白水社、一九七五年四月二七四頁）

漱石は明治三九年九月五日附深田康算宛書簡に「ハルトマンの事は面白く拝見」しました来月もつゞく事と存じます。拝見したいと存じます。」と書いている。

18 小倉脩三「ウイリアム・ジェームス『宗教的経験の諸相』」『漱石の教養』、翰林館書店、二〇一〇年 一〇月 四〇頁

引用部分から、漱石のメモにある〈一八八六ノ発明〉が「場を超えて存在する意識、またはマイヤーズ氏の用語を用いるなら、識域下の意識」の発見であることが理解される。

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士課程二年）